
刻まれる記憶

立花透琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻まれる記憶

【Zコード】

N3145Q

【作者名】

立花透琉

【あらすじ】

田の前に突然現れた記憶喪失の幽霊
実はそいつは…

男子高校生のBLです。

『あれ…あんた、誰?』

突然、目の前でそんな事言われたら、誰だつて言葉を失うだりつ。

都内有名スクランブル交差点。

その付近の、有名な待ち合わせスポットである犬の像の前で、オレ
・梓川駿の前に現れた男がそう言つた。

しかも、だ…

その男、顔がめちゃくちゃ良い。

周りの女から声がかかるんじゃないかと思ひつ。

だけど、今の状況からじや、まず声はかからない

否、かけられない

なぜなら…

「…浮いてる…」

オレが呴いた言葉に、男は『みたいだな』と答える、

「…透けてる…」

更に呴いた言葉に、男は『みたいだな』とまた答えた。

「お前…なんなんだよつ」

悲鳴に近い声に、周囲の人間が一斉にオレを見た。

日曜日の口々は人で溢れている。

その大勢の人間に見られたら、流石に恥ずかしい。

オレは思わず「」と男を促して駆け出した。

これだけ人が溢れていっても、意外と死角はあるもので…
ほとんど人が来ない路地裏で、オレはようやく足を止める。

「…で、一体なんなんだよ…凌」

『え?』

相変わらず浮いている奴は不思議そうな顔をした。

「え、じゃない。オレが聞きたいんだよ

『いや、悪い。凌って…俺の名前か?』

冗談かと思つた

しかし、彼は本気でそう言つてゐるようだった。

「…おいおい…まじかよ…」

頭を抱えた。

ありえるだらうか…

透けてふわふわ浮いた…俗に言つ“幽霊”というヤツに、記憶喪失
つてあるのだろうか

『なあ、俺の名前なのか?』

黙つてしまつたオレに、幽靈のヤツはもう一度尋ねてきた。

「…ああ、そうだよ。八坂凌。これがお前の名前」

『やわか…しのぐ…』

凌は自分の名前を反芻して、まるでテストで単語を覚えるように自分
の名前を記憶した。

『じゃあ、お前は?』

「…オレは梓川駿。お前と同じクラスの…」

『梓川か…』

軽く腕を組み、凌は少し考えるように黙る。

その様子を見ていたオレは、今度は自分の番だとばかりに質問を投
げつけた。

「凌、お前…なんで幽靈なんだよ。…まさか、死んじやつたのか?」

『いや…どひなんぢうな…。どじかを歩いていたのは覚えている
…車にぶつかつたのも…』

記憶を辿るよつて、凌が状況を言葉にする。

『その後は…分からない。次の瞬間は梓川の前にいた』

『じゃあ、お前の身体がどうなつたとかは?』

凌は首を横に振る。

『病院なんぢうけど…事故にあつた後の自分を見てないんで分か
らない。死んでいるのかもしけないけど…』

おこおい、普通こいは慌てるとこひだりつー・?

「死んでるつて…お前なつ。確かめに行けよーー!」

『怖いじやないか。自分が死んでいるのなんて見たくない』

『ば…つ…ガキじやねーんだから! そんなんじや…不幽靈とかそん

なのに「なつちまうぞ！」

オレは携帯を取り出す。

凌の家に電話すれば状況が分かる。

しかし、それを止めたのは凌本人だった。

『いいよ、梓川』

「で…、でも…」

『記憶が無いんだ…。例えば、もし…本当に死んでいたりして…それを悲しむ家族を俺が分からぬなんて…酷すぎるだろ？』

切ないような表情

そつか…

やつぱり、自分の記憶がないのは不安なんだ

オレは携帯を下ろした。

「…分かつた…」

『ありがとう』

「でも…どうするんだよ。記憶が戻るまで、一いつ矢つて幽霊でいるのか？」

『それしか方法がないだろ？』

確かにその通りではあるんだけど…

『梓川…お前は俺を知っているんだよな』

「ああ…」

『教えてくれないか？俺のこと…』

申し訳無さそうにする凌に、オレはそれ以上何も言えなくなつた。

「分かつた」

『助かるよ』

ようやく、凌がホッとしたような笑顔を見せたのだった。

* * * * *

予定の時間よりも早く家を出たはずだった。

余裕をもつて目的地へ着きたくて、時間つぶしの為の小説を抱えて駅まで向かった。

背後で、人が騒いでいるのに振り向いた時には、もう手遅れだったんだ。

目の前に迫る乗用車。

何を考える暇も無く…自分の身体は宙を舞つた。

次に気付いた時には、自分の身体は浮いていて…
どれだけ人が多いのだろうかと思うほど賑わっているのに、誰一人俺には気付かない。

ただ、一人…

俺を見ていた男がいた。

明らかに染めている金色の髪。

一体、いくつ開いているのか分からぬ数のピアスに派手な装い。
自分とは真逆な彼だけは、俺を見ていた。

梓川駿

俺と同じクラスだと言つていた。

幽靈になつた俺が記憶を無くし、頼れるのは彼だけだつた。

取り合はず、付いていつた一人暮らしの彼のアパートは雑然としていた。

最低限の生活が出来れば充分だという感じだ。

「写真見ても思い出せねー？」

机の上に写真を広げて、梓川はクラスメートの名前を告げていく。

『分からぬ……』

「んー……まあ、そうかもな。実際お前とオレと同じ友達関係も違つてしま」

『どうこいつことだ？』

俺が尋ねると、梓川は苦笑した。

「お前はクラスの委員長だったんだよ。オレらはいわゆる問題児」

『委員長……』

「そ。だから……お前はいつもオレらを田の敵にしていた……」

梓川は少し目を伏せた。

「当たり前つちやーそつなんだけどぞ……」

『梓川……』

なんだろう

何故、そんなにも悲しそうな…やりきれない顔をするのだろう

「なあ、凌…」

『なんだ?』

顔を上げた梓川は痛々しい表情をしていた。

「もし…思い出したら…お前はどうあるんだ?」

『思い出したら…』

何も考えていなかつた。

俺は死んだのか

それとも、まだ生き返る可能性はあるのか

TVなどで見るような死神もいない

お迎えなんて来る様子もない

死んだとこう宣言も無ければ、俺はこうして漂つていらしかるべきだ
だろうか

『分からぬ…』だけ、自分の身体を見に行かなければいけないだ
ろうな

「……生きてる、んだよな?」

『それすり…』

- - - - 分からない

なんて中途半端な存在なんだろう

自分自身が分からない

記憶を失って、死んだかも分からないなんて…

「凌...」

まるで絞り出さよつた声。

それきり、梓川は黙ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145q/>

刻まれる記憶

2011年1月26日07時48分発行